

万葉図書・情報室だより65号

長谷寺と『源氏物語』

2024年のNHK大河ドラマは『源氏物語』を書いた紫式部が主人公です。『源氏物語』は主に京都を舞台に書かれています。第22帖玉鬘の巻は奈良県桜井市にある長谷寺が舞台となり物語が展開することから、第31帖までをあわせて「玉鬘十帖」とも呼ばれます。

源氏が若いころに愛した夕顔は物の怪に取り憑かれ、非業の死を遂げますが、彼女には源氏のライバル、頭中将との間に玉鬘という娘がいました。夕顔の死後、彼女の侍女だった右近は源氏に仕えますが、数年後、行方知れずとなった玉鬘との再会を願って長谷へ詣ります。その途中の椿市の宿で、やはり長谷寺に詣でていた玉鬘と偶然再会を果たします。作中で登場人物に「仏の御中には、初瀬なむ、日本の中には、あらたなる験あらはしたまふと、唐土にだに聞こえあむなり」と語らせていることから、長谷寺（初瀬）が当時

すでに靈験あらたかな寺として広く人々に知られていたことが分かります。

『源氏物語』はフイクションですが、長谷寺境内には玉鬘と右近が再



会を喜びあい歌を詠みあった場所とされる「二本の杉」が今も残されています。対岸には玉鬘の庵跡とされる場所に建てられた玉鬘神社が存在します。神社が創建されたのは平成に入ってからですが、江戸時代の国学者、本居宣長も著書『菅笠日記』の中で玉鬘の庵跡について言及しています。

『源氏物語』には、「二本の杉」から参詣に集まってくる人々の有様が見下ろされることや、谷間から吹き上ってくる秋風でとても寒いという描写があります。もしかしたら紫式部自身も実際に長谷寺に参詣したことがあったのかもしれない。

平安時代は浄土思想が広まり、そのため多くの貴族が極楽往生を願ってこぞって寺社へ詣でました。実際に、藤

原道長が長谷寺に参詣した記録が当時の貴族の日記にも残されています。その中



でも、本尊である観音菩薩は女人往生や現世利益をもたらすとされたため、多くの女性の信仰を集めました。『蜻蛉日記』（藤原道綱母）や『枕草子』（清少納言）、『更級日記』（菅原孝標女）などの名だたる女流文学作品に長谷寺の名前が出てくるのもそれゆえといえます。長谷寺の十一面観音菩薩像は三丈三尺（約10メートル）あり、その威容は見る者を圧倒します。あらゆる苦悩に向き合うとされたこの観音菩薩の前で、女性たちは何を願い、祈ったのでしょうか。



長谷寺がある初瀬の地はかつて「隠口の泊瀬」とよばれ、『万葉集』ゆかりの地でもあります。

隠口の 泊瀬の山に 照る月は 盈しけり 人の常無き

作者未詳(巻7・1270)

― 隠口の泊瀬の山に照る月は満ち欠けすることであった。人もまた常無きことよ。―

当図書室では『長谷寺験記』や『豊山長谷寺拾遺』など長谷寺に関する資料や、『源氏物語』に関する資料、また藤原道長の筆跡をみることができ『古文書時代鑑』などを所蔵しています。ぜひ一度足をお運びいただければと思います。

(司書 藤原文代)

※万葉歌及び口語訳は中西進『万葉集全訳注原文付』による。

〈主な参考文献〉

『源氏物語3』

(新編日本古典文学全集 22 / 小学館)

『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讚岐典侍日記』

『新編日本古典文学全集 26 / 小学館』

(新版 古寺巡礼奈良2 長谷寺)

(小野塚幾澄・梅原猛 / 淡交社)

利 用 窓 肉

図書室のご利用は無料です。

閲覧でのご利用になります。

開館時間：午前10時～午後5時半

休館日：月曜日（祝日の場合は翌平日）・年末年始・展示替日

コピーサービス：白黒 1枚10円

カラー1枚50円

奈良県立万葉文化館万葉図書・情報室

奈良県高市郡明日香村飛鳥10

0744・54・1850 (代)